

「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

自分を大切に、そして周りも大切に

佐世保市では、6月1日を「いのちを見つめる日」、6月を「いのちを見つめる強調月間」として、「いのちの大切さ」を考えるようにしています。当然のことながら、「いのちの大切さ」は年間を通して考えていくことですが、特に、6月は子どもも大人も共に「いのちの大切さ」について考え、共に語り合うことができると考えています。自分（自分のいのち）を大切にすると同時に、周り（周りのいのち）も大切にしていきたいものです。

本校では、6月14日（金）から21日（金）まで（土・日を除く）を学校開放期間として、道徳科の授業公開などを実施いたします。多数のご来校をお待ちしています。

また、6月23日（日）には、佐世保市教育委員会主催で東京大学名誉教授の養老孟司氏による講演会も開催されます。会場はアルカス SASEBO 大ホール、13時開場、14時から15時45分まで、演題は「いのちを見つめる」～豊かな未来を生きるヒント～です。無料でどなたでも入場できます。

学ぶ力の源泉は「好奇心」

前青森大学学長の崎谷康文氏の記事に、「人間が生まれながらに持つ学ぶ力の源泉は、好奇心である。好奇心を伸ばし、既知の学びから未知の探求へと飛躍するとき、学びは、大学における学術の境地に至る。」と述べておられます。

確かに、赤ん坊は、好奇心旺盛に、見たり、聞いたり、触ったりなどしながら成長していきます。小学生の子どもたちにも、好奇心旺盛に学んでほしいと思っています。

祇園歴史の旅（その40）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の20年の私記録～」（その2）

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「幼稚園を終えて昭和18年春、光園国民学校入学。もと平戸往還の道筋をたどって要塞司令部の北を通り、石段の裏門から校庭に入ると、西側の泰安殿に向かって深く頭を下げ、石段上の教室に入ったものです。2年、3年と進級するに連れて戦火が身近になり、佐世保の上空にも銀色にきらめくB29のはるかな機体と飛行機雲をしばしば見かけました。防空頭巾を持っての通学、高天山の斜面の防空壕に、空襲警報のサイレンと共に逃げ込む日も多く、昭和20年には空襲に備えての強制疎開の対象となり、一家を挙げて1キロほど小佐世保通りをのぼった小佐世保町へ転居。ほどなく6月29日の佐世保空襲ですべてが灰に。親子3人無傷をとまかく喜び、親類と共に荷馬車1台を借り、郷里の佐賀県藤津郡塩田町へ。

小学3年生の身にとって、小佐世保町への転居と転校、空襲、塩田への避難、敗戦、年末の佐世保への帰還、須田尾町官舎跡住宅への入居、潮見小への誤転入、白南風小への再編入という慌ただしさは大変でした。唯一楽しかったことは、清流塩田川で日がな一日遊び暮らした夏休みと、家にあったおびたらしい書物との出逢いと読書開眼です。戦後、祖母は極端なモノ不足のなか、再び秀才を発揮して新設の戸尾市場に小店を構え、12年間女の腕一本で一家を支えました。市場での商いはヤミ米、麦、砂糖、メリケン粉、黒砂糖、小豆などすべて統制品。朝鮮戦争の昭和25年ごろからは、松川町に再開された京町公設市場も借り、ここを倉庫兼仮住まいとして祖母は早朝から深夜まで身を粉にしていそしみました。

白南風小から山澄中、南高校と進み、9歳から19歳までの戦後10年、言わば庶民生活復興の歩みを私は中心街で見聞したのです。ユニードからダイエー、そしてマンションとなっている一角は、劇場『大劇』でした。戦後の一時期、活弁と楽隊つきの無声映画を上映。時には「実演」として長谷川一夫ら有名な俳優もやってきました。」（続く）

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の20年の私記録～」（その3）と題して、筒井隆義さんの実体験の続きをご紹介します・・・。